

あそ

1
2011





恩田秋夫の
一茶俳句切手

ほちくくと雪にくるまる在所哉

ほちほちとは細かな物のおちる音。(広辞苑) 一茶の雪の句は無尽蔵である。

むまさうな雪がふうはりふうはりと
心から信濃の雪に降られけり

雪とけて村いつばいの子どもかな

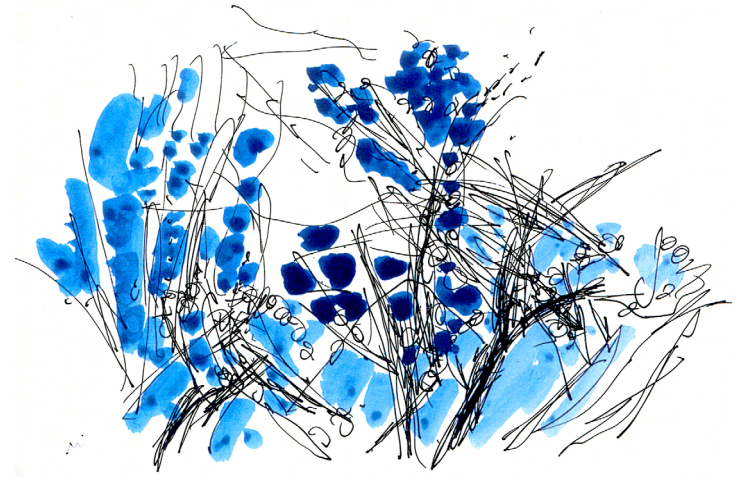
一月号とて『恩田秋夫板画集』より懐かしいお正月風景をご紹介させて頂く。絵の解釈は要らぬが、はねつきのまはりの風物も懐かしい。あのゴミ箱さへ郷愁を誘ふ物になってゐる。この絵一枚の中に秋夫先生のお人柄が彷彿としてきた。

(喜孝)



あを

一月



道の下

こがらしや水の音する道の下
磯千鳥合はす鏡に啼きかはす
人の耳すきとほる日の初尾花
暮の秋鏡の裏に置いておく
空つぽのバナナの箱が十三夜

本町三 佐藤喜孝

冬芽

柔い枝内緒話の赤とんぼ
枇杷の花ほどよき日なり立話
見ゆるもの皆透きとほり冬に入る
路地裏の鉢にぽつぽつ冬芽萌ゆ
冬木の芽明日の望み疑はず

富田 長崎桂子



秋の水青鷺己が影うつす
 小春日や鯉の大口人を恋ふ
 鐘楼の青銅に映ゆ秋夕焼
 舞ひ込みし枯蠟螂に宿を貸す
 憂き心すいと受けとむ石路の花

大宮 早崎泰江



黄落や黄泉のにぎはひありてこそ
 来し方を飛び石として冬深く
 エレベーターは奈落へどこも十二月
 ものなべて薄氷のなか喉佛
 銀杏黄葉手帳にあふれやはらかに

河田町 堀内一郎



ボジョレーの解禁日なり鳥渡る
 ベランダに見知らぬ木の実二つ三つ
 箱根路や車窓の紅葉もつれ会ふ
 柿のれん夕陽に映えて重く揺れ
 空晴れて短い秋が終りさう

中井 森山のりこ

ないしよ

落合 森理和

石路の花ないしよないしよとこそばゆし
 影絵なす障子に小さき蠅動く
 白障子蠅の羽先はうす墨に
 散り騒ぐ枯葉をじつと乳呑児の
 あを深く拵がり見せし櫛もみぢ

北村^{フッチョウ}の韓屋^{ハリケ}連なる冬の雲
貫木の金具キラリと冬の月
四阿に先客のゐる小春かな
山陰路鉛のやうな冬の雲
溶け残る辛子ゆらめくおでんかな

本町三
吉成美代子

散りもみぢたひらな道につまづけり
日にむかひ白曼珠沙華曼珠沙華
肩に触れかたにとどまる枯葉かな
交番に立つひと冬の手をかくし
車椅子月のしづくを浴びながら

鍋屋横丁
吉弘恭子

あを十周年

榛名湖やあまねく映す紅葉色
雨上り山茶花の白堪能す
駅迄に挨拶多し小六月
教りて教りて十年花八ッ手
冬萌や句集頂くあを^{ととせ}十年

清瀬
赤座典子

小春日のあを十年の中にゐる
冬ぬくし清澄庭のあをと会ふ
冬時雨友の一面かいまみる
口喧嘩タオルなげたし七五三
低くとぶ黄の目立ちたる冬の蝶

聖蹟桜ヶ丘
安部里子



薪割の鉋の光は冬構
 丁寧に拭き掃除して冬の星
 条幅の墨のにじみや冬の凧
 花八つ手うしろに誰か居てくれて
 いちにちが短きことよ冬蒲公英

曳舟遠藤実



柿どころ尋ねて村の静かかな
 つややかな柿に見入りて子規のこと
 天高し健やかに老い句に遊ぶ
 ステッキの容よき人明治節
 秋時雨新聞重くするニュース

逗子鎌倉喜久恵

清澄庭園

川崎・小田栄 木村茂登子

大江戸線深きところから出て小春
 清澄の小春を遊ぶ鴨と鷺
 涼亭へ向かふ小春の磯渡り
 菖蒲田の秋寂ぶ風情株寄せて
 行く秋を惜しみ懐古す明治の世

産む

京橋 篠田純子

胎内でまはれ右する秋時雨
 観音に継る安産秋ふかし
 大悲鳴のあとに産声秋の星
 かへり花つうーんと乳張る記憶かな
 ほわわんほわわん乳を欲しがる夜のながし



日の鴨と日陰の鴨と入替る
 新涼や使ひはじめのカタン糸
 一枚の落葉の音の日暮かな
 雨多き秋来るなり生くるなり
 満員の猫の病院小六月

千駄木 芝 尚子

挙手多数

ガスタンク鷓一群わたりけり
 挙手多数よって今日より冬に入る
 初時雨ひとの葬儀を見て通り
 笹群らやささめきわたる初しぐれ
 片時雨砥石小さく濡れてあり

鉦地東出 定梶じょう



踏切のカンカンカんと柿熟す
 野仏に手を合せたり菊日和
 運動会二日遅れて晴の朝
 雨上がる秋の祭の遠太鼓
 あを十年櫨の紅葉に迎へられ

所 沢 須賀敏子



帯解きの母子をかこむエレベーター
 一二冊故い「馬酔木」を見る夜長
 足下の湿るさみしさ秋しぐれ
 あたらしき卒塔婆の下の青みかん
 さなきだに増えることなき木の葉髪

浦 和 竹内弘子

山茶花

田端 田中藤穂

山茶花や暖かかりし句友の手
腕まくり到来の鱒捌かんと
星五位のじつと動かず秋の杭
わが服よりこぼれ畳に紅の萩
手帖残りうすくなりたり冬机



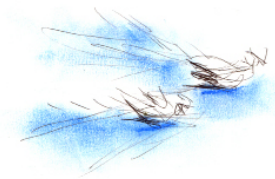
参宮橋 續木文子

石仏の笑って見ゆる月明り
流星を見てゐる人に山二つ
軒先に干柿ならび月明り
白菊を供へて仏と会話する
庭掃きて残る落葉に風少し

仁王立

三光坂 東亜未

金秋や世に一冊の『仁王立』
古家の紅葉且照り且散れり
一念の「井筒」舞ひ終へ冬ぬくし
木守柿半分残す鴉かな
絵具箱二十四色照紅葉



前月作品

そのことは知らぬふりして酔芙蓉
 豆の飯ひとつ嬉しきことのあり
 ミツバチの巣をその奥に竹の春
 月下美人そり返るほど開きけり
 観音に母を見る日の実むらさき
 やすみなく枝豆食べてをりにけり
 秋澄むや付添ひの子のあたたかく
 われ思ふゆゑに秋霖トタン打つ
 梅擬薄型テレビ届きけり
 回送電車涼しげに通過せり
 一遍忌草を掴みて指濡らす

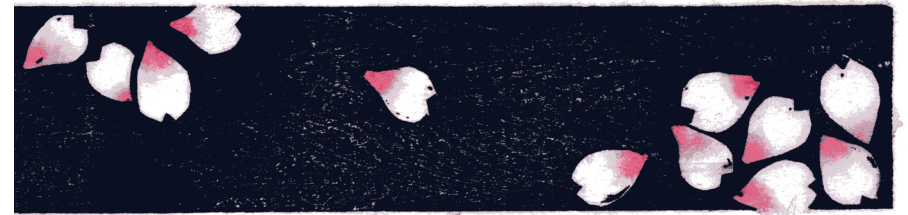
遠藤 実
 鎌倉喜久恵
 木村茂登子
 齊藤裕子
 篠田純子
 芝 尚子
 芝宮須磨子
 定梶じょう
 須賀敏子
 竹内弘子
 田中藤穂
 喜孝抄

喜孝 抄

一人一句

明月やみな軒かく動物園
 足指の一本捻挫牛蒡引く
 長き夜のラジオは古き歌謡曲
 目的地遠くにありて酔芙蓉
 桐一葉同窓会は打ちどめに
 励ましを励まし返す秋時雨
 里の柿厩鶏小屋納屋母屋
 秋の日のすんと暮れし友の去る
 白壁に靴跡ひとつ秋の風
 水尾ひきて秋昼の面静かなり
 「もってのほか」うすくれなゐの菊脛
 秋の雨ずぶぬれのまま八十才

佐藤喜孝
 東 亜 未
 長崎桂子
 早崎泰江
 堀内一郎
 森山のりこ
 森 理和
 山莊慶子
 吉成美代子
 吉弘恭子
 赤座典子
 安部里子



明月やみな軒かく動物園

佐藤 喜孝

本当に軒をみんなかくのだろうかと、つい思ってしまうが寝息も入れると、かかない生き物は居ない。寝息は眠っているときの呼吸音、軒は呼吸の雑音と辞書にあった。どちらも生きていくときの音である。我が家でも動物園でも同じだ。明月やという季語によって明るく、生き生きと感じられた。動物園の句で軒を詠むとは。

帰る家あるから行ける大花野

森 理和

物事に溺れるということがあがるが、この句のように色とりどりの草に溺れてしまい、いつまでも其処にいたい衝動に駆られると思うときがある。あることに夢中になるということは若さが潜んでいること。「帰る家在るから行ける」本当に幸せでいい。殺伐とした国や人々が沢山居るのがさびしい。

励ましを励まし返す秋時雨

森山のりこ

負になるものがあるから人から励まされるのだと思う。どんな人にも何かしらあるものだ。お互い持ちつ持たれつが本当の友である。季語の秋時雨が静かな心持ちをあらわしていて良い句になった。季語がいいと詠んでいても穏やかな気持ちになる。

秋の日のすとんと暮れし友の去る

山莊慶子

日が長いと言われている秋の日でも、いつの間にも暗くなっているのに気づく時がある。すとんと暮れるという言の葉は秋の日の暮れ方そのものである。その上お友達が帰ったのではなく、去ったのである。帰る・去るを比べると此の句の去るは一段と淋しさが感じられる。同じように使っている言葉でも比べると感じ方が違うことがはっきりした。言の葉は大事である。

目薬の一滴それし夜寒かな

芝 尚子

目薬ほど入れにくいものはない。つい反射的に目を閉じてしまう。涙のごとく頬をつたってゆく方が多い。それでも3回に1回は入れることが出来る。反射神経が敏感なのかなあと……。指先の鈍ってしまいう季節。

鯖雲も麒麟のかほも遙かかな

定梶じよう

北陸四県に冬空に青空はないのかなと思っっている。新潟にはなかったように思う。秋の空の鯖雲は見ようによつては美しい。好きな雲のひとつだ。若かりし頃に見た麒麟の顔、今冬になっての空の景色時の長さの違いはあつても何故か遠くに感じられた。二つを並べることによつて相乗効果が生まれた。「鯖雲も」「かほも」の「も」によつてまだまだ遙かになってしまったものが沢山あるがそのうちの詠まれたものは二つでしかない。何だろうかと想像も楽しい。

観音の胸ふくふくと秋の風

篠田純子

穏やかな顔の観音様に出会ふと心が綺麗になつたように感じる。この句の「ふくふく」は観音様の胸なのか、秋の風なのかとつと思つた。詠んでいるうちにどちらにもかかつているんだと確信した。穏やかな風・ふつくらとした胸のおもいがひとつの言葉で増幅されている。

回送電車涼しげに通過せり

竹内弘子

観音に母を見る日の実むらさき このように句に詠んでくれる娘がいることはなんて幸せなんだろうと思う。

真夏の電車ほど暑苦しいものはない。会社勤めをしていたとき、東京駅から都電で茅場町まで乗った。証券会社や取引所がかたまつてあつたので、それは其れは凄いい混みようだった。それに比べると、回送電車ほどさっぱりとしている電車はない。通過

初心の頃

と 白選十句



虚子 梁筆 '09. 4. 19.

していったのが句になった。誰も乗っていない電車の運行は何だか寂しい気もするが、涼しくて乗ってみたい気がする。

余生とは他人の言ふこと敬老日

鎌倉喜久恵

余生とは老後に残された人生と辞書にあった。残された人生ってどういうことだかよく分からない。老後というのもこれまたよく分からない。いつから老後なのか、決められているわけではないから。生きているうちは現役とちよくちよく聞く言葉である。九十歳を過ぎても現役で行動されている方は、今自分は余生を送っているとは思わないだろう。この句を詠んで余生ということは自分が決めることであって、思っていないのに余生と言われると……。自分のことは自分で、全くその通りである。分かる筈がない残りなど考えず生きるだけ。悔いが残ることのないように生きたいと思っていると作者も思っているだろうし私も思っている。この一年作品についての思いを書かせて貰った。いい句に出会い

勉強もさせてもらった。これを糧にして前向きに俳句に向かって頑張ろうと思っている。有り難うございました。

吟行案内

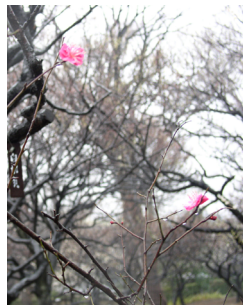
羽根木公園観梅

日時 二月十三日(日) 十一時

集合場所 小田急線「梅ヶ丘」北口

申込先 090-9828-4244 (佐藤喜孝)

二月八日までご連絡下さい。



花三分大樹の持てる瘤と穴
風の息ゆるく激しく散る櫻
翅の裏表みせ蝶遊泳す
黒ずみて臭ふ水路や原爆忌
切干を煮て此の家の居場所かな
敬老日減塩醤油持ちて訪ふ
立冬の木曾馬の胴長きかな
冬の日の遺品に悲あり彦根城
湯豆腐やからくりめきて浮き沈む
薄氷の割れさんざめく流れかな

長崎桂子

東京で勤務していた娘から「今度会社の方で句誌を発刊するけど私は仕事しながら俳句を詠むなんて出来ないから、お母さん代わりに作って送って」と電話があった。慌てて、どうしようと思書館で「俳句の作り方」の本を借りました。そんな或日、近畿日本鉄道の小さな駅で降りた折りに出会った情景に、なんとなく浮かんだ言葉が「白い杖初夏の踏切探りつつ」とメモしました。これは俳句になっているかしらと思つたものです。

その後何か光景を目にした時五・七・五を思いその都度に自問自答しながら、その時の自分を精一杯表現して投稿してきました。

点線の阿部英雄社長様・阿部寒林先生・獐の高島茂先生のご教授を戴き今、佐藤喜孝先生のご指導をお受け出来ますことを深く感謝いたしております。拙い句ながらこの頃は、作句するのが楽しみになりました。

佐藤先生はじめ「あを」の皆様、これからもよろしく御願いたします。

鰯雲お待ちなさいね猫の餌
のぼり坂下り坂ある大晦日
くさめして何か抜けたか軽くなる
かみあはぬあ・うんの呼吸とろろ汁
新年の猫にかつぶし三グラム
秋の海沈む夕日の音がする
我と猫背水の陣冬に入る
異次元にすうとゆけさう冬の月
混沌や風船つけて飛ばしたし
髪洗ふすべて許せる心地して

安部里子

十年位前になるでしょうか。当時、笹塚のアパートに住んでいらした内藤悦子さんのところに何回かお手伝いと、遊びに伺ったことがあります。

その時古い手帳に好きで、五七五と庭に来る蝶・鳥・蛙等、又花や木も少しあつて春夏秋冬の我家のドラマをメモしたものを持って行きました。

テーブルの上には、歳時記と俳句の本が山積みになっていて、いくつか手にとって読んで下さったりしました。

季語を入れないと俳句にならないとお教えいただいた事をおぼえて居ります。

その後の流れは、はつきりとおぼえてなく今日に至っております。

近世俳諧と漢詩文

参拾八

王 岩

南朝四百八十寺

菜の花や目口へはいる談儀鐘

黒 露

多少楼台煙雨中

はるさめや簾の中の女はら

黒露。山口黒露（一六八六〜一七六八）江戸時代中期の俳人。名は守常、別号に雁山・稲中庵。山口素堂の門人。国学・茶道に通じ、箏も善くした。編著に『有渡日記』『駿河百韻』など。

前掲の二句は『みをつくし』（黒露追善集）（久住・秦娥編）に載せてある。それぞれの句題は当時流行っていた『三体詩』所収の杜牧「江南春」に由来する。

千里鶯啼緑映紅	千里	鶯啼いて	緑	紅に映ず
水村山郭酒旗風	水村	山郭	酒旗の風	
南朝四百八十寺	南朝	四百八十寺		
多少楼台煙雨中	多少の楼台	煙雨の中		

「黒露のはなんだか分かるようで分からないですね。何かヒントあれば是非ご教示のほどお願いします。」王岩先生のメールの一部です。難しい宿題が出ました。「談儀鐘」の談儀の使用は「申楽談儀」が知られてゐる。漢字が違ふが「談議」とふ語がある。仏教の教典を説くこと、説法とある。派生語に談議僧・談議坊・談議参りなど。句の前書の「南朝四百八十寺」から類推して使用した字が違ふが「談議」の意かも知れない。鐘はその後使はれても不自然ではないが……確とは分らない。「花の比談義参もうらやまし 越人」。「談儀参も遅参の人は縁にみて聴聞するそ佗しき」〈類船集〉と辞書にある。談義参は楽しみのひとつであつたらしい。〈類船集〉は「談儀」を当ててゐるので黒露の句も語意は「談義」で間違ひなささうだ。句は「菜の花や」で切つてはゐるが、は、位に読めないだらうか。菜の花は目と口を楽しませてくれる、耳は談義を聞き目と口で菜の花を愛でてゐるといふ句意でいかがであらうか。

次句は又の機会に。

（佐藤喜孝）

あをかき集

堀内 一郎選



うたかたのただ中に鯉鳩

月呑んで風をつかみしひとり酒

花束のやうに葉付の大根抱く

ひまはり枯れゴツホには耳いくつ

陣痛の眉阿修羅なりそぞろ寒

泣く孫に乳さはらする夜長かな

生きながら葬らるるや冬鴉

現住所東京日向冬の猫

枯野から一目散に猫かへる

竈猫鍵かけるのをみてる

ふりむくと黒猫がある冬の町

歩きゆく猫犬鳩冬隣

ごみの日や落葉の焚火遠くなり

警官の腰のピストル熊穴に

冬の月訛のまじる国境

篠田 純子

佐藤 喜孝

遠藤 実

吉弘 恭子

芒原探しあぐねし出口かな
眠れない街に枯葉の東京都
暗碧の空に金星月ならぶ
未枯のまつただ中に立ちつくす

しばらくは仁王のままに大噓

踊り子の翳がチラチラシクラメン

金星の美しすぎる寒さかな

もの欲しさうな貌を晒してゐる師走

水澄みて青空はいま無一物

おでん鍋先づ大根に一の箸

冬ざれて脳細胞も目減りせり

冬麗や人影に寄る鯉の口

梅干しとお粥もよけれ文化の日

どんぐりや乳呑児笑ひみな笑ふ

侘助や来世現世の見へぬまま

はじまりもしまいも寂し十一月

盆栽の小さき庭の紅葉もゆ

立枯れの桜は切られ夕時雨

通い馴れし道の紅葉鮮やかに

木村茂登子

芝 尚子

森 理和

森山のりこ

荒荒し津軽三味線そぞろ寒

楽器持つ男と隣る電車冬

あの人は冬星を見に行つたまま

スカイツリー煙突のやう冬の月

明洞ミョンドンのバスを待つ間の六花かな

坂ばかりソウルの町の灯冴ゆ

山茶花の蕾ほんのり紅にじむ

茶の花やよく笑ふ母甦る

受験生は大変と母毛糸編む

後手に結ばれてをる泥大根

冬ぬくしイルミネーション人の波

おほらかに昼酌み交はず囲炉裏端

落葉ふむさくさくとはたカラカラと

田中 藤穂

吉成美代子

赤座 典子

東 亜未

須賀 敏子

長崎 桂子

鎌倉喜久恵

佳句後言

花束のやうに葉付の大根抱く

純子

平常の生活感が溢れていて頼もしい。葉付きだから花束になるし、生きる喜びもうかがえ素朴な笑いが込みあげる。「抱く」で一句、

師走嬰兒を花束と抱き退院す

逸名

ふりむくと黒猫がゐる冬の町

喜孝

枯れ枯れた冬の町。黒猫が代表門衛のように印象的で絵になっている。不況の町に黒のエネルギーシユな姿が町の励ましにも、支えにも。

ごみの日や落葉の焚火遠くなり

実

最近都心は区の清掃局の車が来てごみ類を回収してゆく。焚火は消防署も厳しく、御法度のようなうだ。

芒原探しあぐねし出口かな

恭子

例えば箱根千石高原あたりの、芒の群落の中で迷子になってしまったのであろう。山であれば遭難の可能性も、やがて出口が見えてホッとした。あぐねしの焦りが直に伝わってくる。置き換えれば、この芒原、昨今の出口の見えない世の趨勢に思える。

月呑んで風をつかみしひとり酒

恭子

さびしい、ひとり酒。お相手は天上の名月、風と遊んで憂さを紛らわす強かさ、大自然と一枚に。

「我が心もと月の如く、月もまた我が心の如し」

寒くなり、ことに年の暮れなどあちこちで焚火風景が町の活気そのものだった。焚火の人間交流が懐かしい。

峠見ゆ十一月のむなしさに

細見綾子

後手に結ばれてをる泥大根

東亜未

後手は泥棒姿であり泥大根が躍如として、笑いをそぞる。見事な俳諧ふる舞と言って良い。さりげなく枯れた作者の「俳句の手」を感じる。

金星の美しすぎる寒さかな

茂登子

対象への思い入れは半端ではない作者の姿勢にうたれる。突きつめた極限にこそ美が感取される。

「寒さかな」で「忘れていた一句

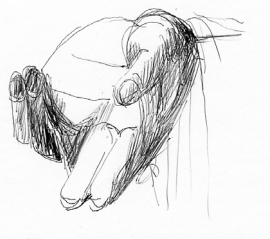
霧はれて湖におどろく寒さかな

飛鳥田嬪無公

はじまりもしまいも寂し十一月

理和

十一月は立冬、小春、文化の日、勤労感謝の日とあり行事も地味だし、十月の賑やかさ華やかさ、十二月の重さはない。挟まれて、一とやすみという月のような。先輩の作にも、



あを柳集

兼題 合

佐藤喜孝 選

足に合ふ靴得てたのし落葉道

靴を意識しないで歩くことは楽しい。足弱になるとなほさらである。そのやうな靴を履き落葉を踏む音を楽しんでゐる作者である。一歳半の子供でも靴の好みがある。過日靴を求めに売場へ行つたさうだが、古い靴を頑として脱がなかつたさうだが、ある靴の前では素直に履き替へたさうだ。私も靴選びには苦労してゐる。

歩合制と靴の片べり暮はやし

膨らんだ靴を提げ暑い日も寒い日も歩いてゐる人を見掛ける。歩合制といふ使ふ人には便利な方法である。靴の片べりと云ひ暮はやしと云ひさびしげな句である。

題詠「合」（順不同）

足に合ふ靴得てたのし落葉道

田中 藤穂

牛鍋や二合の酒のまはりけり

ハモニカに合唱湧くや初紅葉

篠田 純子

合鍵をひとつ多目に文化の日

吉弘 恭子

合憲違憲桜木蓮菊牡丹

歩合制と靴の片べり暮はやし

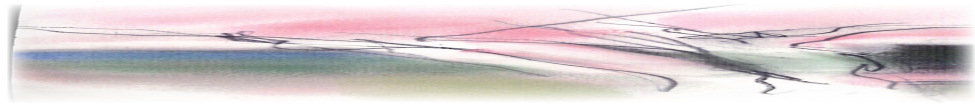
合作はすこし濃い味子供の日

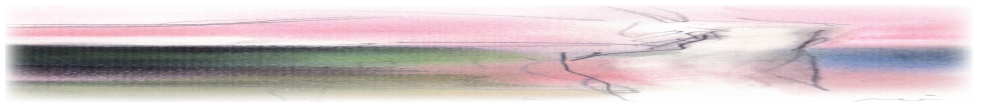
鳴き合ふて子猫の過ぐる茶垣かな

二合半こなからを二人で酌みし二日かな

「山」と「川」極月半ばの合言葉

木村茂登子





猿蟹合戦オペラになった柿と栗
 向き合ひし珈琲のちり冬はじめ
 朝寒しをとこの合せ鏡かな
 二回目の合鍵作る冬帽子
 二人して目で合図する日向ぼこ
 文化祭夫婦合作書と墨絵
 目を合せ椎の実を食む祖母とわれ
 合唱の高音低音冬の星
 本堂に読経と合掌御取越
 笑はない集合写真セピアの雪
 大国の右手どうしに梅寒し
 溽暑なり死に転合の動物園

竹内 弘子

安部 里子

長崎 桂子

佐藤 喜孝

十一月の句会

傳 中野区 カフェ傳

立冬や万年筆を洗ひけり
 富士は雪ハレー帽ほど輝かす
 立冬や万年筆を洗ひけり
 菊人形虚けの顔のなかりけり
 十字架のごとく案山子を担ぎゆく
 頸すぢの凝り馴れ馴れし今朝の冬
 女郎蜘蛛この藪中の密かごと
 草の葉の虫穴だらけ文化の日
 草の根に日の差すおんぶはったかな
 時来たりもぞもぞと草の絮
 一枚の落葉の音の日暮かな
 うす墨の墨絵の柿の熟れてみゆ
 渋柿のたわわに深き空の色
 人の耳すきとほる日の初尾花
 暮の秋鏡の裏に置きし物
 散紅葉たひらな道に躓けり
 車椅子月のしづくを浴びながら

敦子
 弘子
 綾子
 尚子
 茂登子
 喜孝
 恭子

駅迄に挨拶多し小六月
 戸の外に柿置いてあり日曜日
 榎櫃落つ喘息の娘は嫁に行き
 菩薩さへ笑つて見える月明り
 秋刀魚の日権之助坂煙立つ
 「新世界」第二乗車年迫る
 鯛焼の親分もらひ稚魚もらふ
 不覚にも立冬の蚊に刺されけり
 欲しい物みんな集めて池の月

七座句会 休会

典子
 敏子
 実子
 文子
 喜久恵
 寒林
 藤穂
 理和



傳句会 毎月第2火曜
 カフェ傳 森 理和
 (03-3368-4263)

調句会 毎月第3金曜
 岸町八公民館 竹内弘子
 (0488-86-3501)

あを吟行会
 詳細は吟行案内で

七座句会 毎月第4火曜
 小川苑 吉弘恭子
 (090-9839-3943)

創刊以来カットを使はせていただいてゐる恩田秋夫画伯の作品が切手になりました。新年から嬉しいことです。80円切手十枚と切手の数倍の作品計十二点が紹介されてゐます。今年一年ご紹介させて頂きます。

風邪が治つたと思つたらまたひいてしまひました。一月号から遅刊の言い訳とは情けないことです。このごろ外に出ると風邪をひくやうです。また一度ひくとなかなか抜けなくなりました。楽譜には休止符があるやうに風邪を理由に怠けることにしました。おゆるしを。

壹歳半の滋子を軽視す冬の猫

これは『青寫眞』の一句です。このころは家に猫は居なかつたのでよその猫との出逢ひです。滋子の子どもこの二月で一歳半になります。ティリ・エイマは生れたときから家に猫がゐます。この猫が一番

怖がつてゐるのがエイマです。エイマは動物が大好き、猫を怖がりません。撫でてゐる指の間に猫の毛をががあります。猫は怖がつて近付こうとはしません。只ひたすら逃回つてゐるこのごろです。何時になつたら仲良くなるのでしょうか。

(佐藤喜孝)

二〇一一年一月号

発行日 十二月十一日

発行所 東京都中野区中央2・50・3

電話 090・9828・4244

佐藤喜孝

印刷・製本・レイアウト 竹僊房

カット／恩田秋夫・松村美智子

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年

郵便振替 00130・655526(あを発行所)

乱丁・落丁お取替えます。